



県HPからも閲覧可能です

～田植え後は適切な水管理で分けつ促進を～

6 月 日	上 旬			中 旬			下 旬	
	1	5	10	15	20	25	30	
生育	分 げ つ 期							
	5～6葉期			8～9葉期				
水管理	湛 水					中 干 し		
	※活着後は浅水で分けつの発生を促進。低温時は深水で保温							
作業				葉いもち防除		※箱施用剤、側条施用剤を使用していない場合		
	斑点米カメムシ類対策 ～畦畔除草～							

図 今後の作業目安

1 今年の気象経過と生育・作業状況

- 4月の気温は、平年よりもかなり高く、日照時間も多くなりました。5月上旬は気温、日照時間ともに平年並となりましたが、中旬は気温は高く、日照時間も多くなりました。
- 好天の日が多く、ほ場作業が順調に進んでおり、管内の田植え盛期は、平年より1日早い5月21日頃と見られます。
- 5月21日に仙台管区气象台から発表された1か月予報では、向こう1か月（5/23～6/22）の平均気温は、高い確率が50%となっています。1週目（5/23～5/29）は高い確率が70%となっています。

2 本田準備・田植え ～田植えは極度の低温時は避ける～

令和7年度の収量は平年並でしたが、穂数が平年よりかなり少なくなりました。昨年度は田植え直後に低温があり、初期分けつが確保出来なかった事や、近年減少傾向にある栽植密度の影響によるものと考えられます。田植え後は、適切な水管理により稲の生育促進を図り、茎数確保に努めてください。

目標茎数を確保したら、速やかに中干しへ移行し、倒伏しにくい稲体づくりを行ってください。

①分けつを促進させる水管理

- 活着後の水深は、2～3cm程度の浅水を基本とします。ただし、日中の最高気温が15℃以下の低温時には、やや深水にし、保温に努めます。
- 分けつの発生は、昼夜の水温差が大きい場合に促進されます。このため、入水は水温の低い早朝に行い、日中は止め水とし、水温の上昇を図ります。

②還元（ワキ）対策

- 気温が上昇すると、土壌還元（ワキ）が起こりやすくなります。ほ場に足を踏み込んだ時に気泡が発生し、下葉の黄化が見られる場合は、短期間の落水や水の入れ替え等を行い、根の健全化に努めます。
- 落水する場合は、除草剤やオリゼメート粒剤等の散布後日数に注意してください。

③藻類・表層はく離対策

- アオミドロ等の藻類や表層はく離の発生が多くなると地温や水温が低下し、生育が抑制されるため適切な対策を行ってください。

- アオミドロ等の藻類や表層はく離の発生が多いほ場では、気温の低い早朝や雨の日に水の入れ替えを行ってください。水管理だけで十分な効果が見られない場合には、中耕機によるかく拌や藻類・表層はく離に適用のある除草剤を散布してください。

【カドミウム吸収抑制対策について】

- カドミウム吸収抑制対策として行う出穂3週間前から出穂3週間後までの長期間の湛水管理に備え、中干しは遅れないようにしっかりと行ってください。
- あきたこまちRはカドミウム低吸収品種であり、対策期間中の湛水管理は必要ありません。そのため、中干し終了後は間断かん水とします。

3 除草剤の適性な使用

- 一発処理除草剤の多くは、ノビエ限界葉齢が2.5~3.0葉となっていますが、効果安定のために、2葉期までの散布が望ましいです。目安として、代かきから10日以内の一発処理剤の散布が効果的です。
- 除草剤散布時の水深は、粒剤で3~5cm、フロアブル剤やジャンボ剤、豆つぶ剤等の水中拡散性の剤では5~7cmとし、薬剤が拡散しやすいように水深を確保します。
- 除草剤散布後7日間は止水とします。田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりとかん水します。
- 中・後期除草剤の使用にあたっては、雑草の草種や生育程度に応じて適切な剤を選択してください。

4 主要病害虫の防除対策

①いもち病

- 令和7年度は穂いもちの発生が多くなりました。本田では、葉いもちの発生を防ぐことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことが出来ます。以下の点に注意して葉いもち予防をしてください。
- 葉いもち防除は、箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかで必ず実施します。箱施用剤や側条施用剤を使用していない場合は、6月15日頃（6月12~18日）に、オリゼメート粒剤を10a当たり2kg散布します。
 - 補植用の余り苗は葉いもちが発生しやすい状態になります。周辺ほ場への強力な伝染源となりますので、補植終了後は、水田の泥の中にしっかりと埋めるなどして、完全に処分してください。

②斑点米カメムシ類

- 斑点米カメムシ類は、着色粒（斑点米）発生の原因となり、米の品質低下を助長します。管内でも、例年、斑点米の発生による品質低下が多く見られます。
- 斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ）は、休耕田や畦畔等のイネ科雑草で増殖し、これらが水田に侵入して加害することから、着色粒の発生低減に向けて、雑草防除を徹底しましょう。
- 農道・畦畔の草刈りは稲が出穂する15~10日前までに数回行います。草刈りは地域でまとまって徹底して行うことで、斑点米カメムシ類の密度低下に努めましょう。
 - 本県の主要な加害種であるアカスジカスミカメは、ホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエが水田内で発生していると、その雑草の穂に産卵し増殖します。一発処理除草剤で水田内の雑草を抑えきれなかったほ場では、中・後期除草剤を適切に使用して、水田内の雑草防除を徹底しましょう。

③イネドロオイムシ

- 一部防除圧の低い地域で増加傾向が見られます。育苗箱施用剤や側条施用剤で防除を行っておらず、下記の基準を超える発生が確認された場合は防除を行ってください。
- 産卵期（6月上~中旬）の卵塊数が1株あたり0.5個以上の場合は防除が必要になります。6月中旬の心化盛期に登録のある茎葉散布剤で防除を行ってください。

熱中症対策には環境省の熱中症予防情報サイトを活用下さい



※クマにご注意下さい
クマに関する情報は
こちらから



秋田米栽培情報LINE
県内の水稻生育状況や水稻・大豆の技術情報、異常気象対策などの情報を発信しています。

